



## 第4章

# 苦難の中の希望

「光は暗闇の中で輝いている。

暗闇は光を理解しなかった。」

(ヨハネ福音書 1・5)

## 暗闇の中で

日本が戦争へ突き進んでいった時代、キリスト教は敵国の宗教とみなされ、苦難を経験しました。多くの聖職者や信徒がクリスチャンであるというだけで、疑いをかけられ、抑圧される時代が再び来たのです。カトリック教会も、他の多くの宗教と同じように戦争を目的とする国家体制に組み込まれ、協力を余儀なくされていきます。しかし、その暗闇の中でも、カトリックは正義や平和を求める人びとに希望の光が射す窓の一つでもあったのです。

# 国家主義と キリスト教

キリシタン禁制の高札の取り下げ以後も、江戸時代に浸透した「キリスト教＝邪教」観は根強く残り続けていました。1889年(明治22年)に制定された大日本帝国憲法は信教の自由を定めたものの、その翌年には、天皇を中心とする儒教的な国民道徳を唱える「教育勅語」が發布され、これを学校で朗読したり、天皇の肖像写真(御真影)を拝礼したりする「愛国教育」が広く行われ、天皇を神格化するようになりました。その一方で、キリスト教は教育勅語と相容れないという批判(「宗教と教育の衝突」論争)が繰り返され、またミッションスクールをターゲットとして学校における宗教教育や宗教儀式が禁止されました(文部省訓令12号、1899年)。こうした風潮の結果、たとえば1905年(明治38年)日露戦争を終結させたポーツマス条約に反発する群衆が暴徒化して、新聞社、政府機関、警察署などを襲撃した事件(「日比谷焼打事件」)の際に、カトリックやプロテスタントの教会も放火されたり、破壊されたりしたのです。

## 軍国主義の高まり

さらに軍国主義が強まる中、社会的圧力が高まり、キリスト教は反国家的であるという批判が繰り返されました。カトリックについても、たとえば、1926年(大正15年・昭和元年)には長崎の新聞が、暁星中学の卒業生が兵役を拒否したという誤った記事を掲載して世論を騒がせました。1932年(昭和7年)には東京の新聞各紙が、上智大学、暁星中学、海星中学などが「愛国教育」を行っていないという批判を繰り返して、当時、男子学校に導入されていた軍事教練のために将校を派遣していた陸軍も圧力を加えました。地方においても、盛岡の東北高等女学校(現・盛岡白百合学園)や熊本の上林高等女学校(現・熊本信愛女学院)等に圧力が加えられました。特に、軍事拠点として重視された奄美大島では、1934年(昭和9年)には、カトリックの大島高等女学校が廃校に追い込まれたほか、外国人宣教師が追いつき出され、キリスト教に反感を持つ島民によって教会堂が破壊されたり、多くの信者たちが背教誓約書に署名させられたりしました。

キリスト教以外でも、神道系の新宗教で国家神道を脅かすと見られた大本教は1935年(昭和10年)に治安維持法違反で1,000名以上が検挙され、教団施設が破壊されたりしています。

戦後の焼け跡に立つシスター方と聖心女子学院の生徒たち (聖心女子学院アーカイブズ提供)



## カトリック愛国機具体化

## 全国の献金揃ふ

長崎カトリック兵器献納  
會の手で愈々献納さねん

客年、カトリック信者の忠誠を表現する目的を以て、長崎市には有力なカトリック信者から成り早坂長崎司教を代表者とする長崎カトリック兵器献納會が組織せられたのであつた、此の會が發起者となり、當局にカトリック愛国飛行機を献納せんとする案が議せられたが、結局全国カトリック者の共同の美舉となした方を可とするに意見の一致を見たので、關係機關を通じ、昨年四月東京大司教館で開催せられた全日本カトリック教區長協議會に該案が提出せられ、終に全日本のカトリック教區長が該案に賛同せるに至つたのであつた、かうした決議は右教區長協議會直接發表せられた「全日本教區長の共同教書」に發表せられた、爾來各教區に於いては、其所屬教區長の指導に従ひ、種々の方法を以て、カトリック愛国機献納のために誠心誠意具體的に共同行動を執るに至つた

1936年3月1日付『日本カトリック新聞』

(『歴史から何を学ぶか カトリック教会の戦争協力・神社参拝』(新世社)p.68からの引用。)

カトリック信者の忠誠を表すために組織された長崎カトリック兵器献納會を中心とした募金活動により「カトリック愛国飛行機」が陸軍に献納されることになったことを伝える記事。

## カトリック教会の戦争協力

こうした圧力の高まりを受けて、カトリック教会では司教など教區長を日本人に交代させ、カトリック学校でも校長を日本人にしたり、学校名を日本風に改めたりするところもありました。また、教会はそれまで、国家神道も宗教であるとして拝礼や儀式への参加を信者に禁じていたのですが、その方針を転換することになります。1935年(昭和10年)には全国のカトリック教会の代表者(司教、教區長)が共同文書を發表し、「万世一系の天皇」を中心とする国家観を承認し、これに忠君愛国を尽くすことは信徒の義務であると唱え、そのことを示すために軍に飛行機を献納するための寄付への協力を呼びかけました。一方、中国における共産主義の広がりに対して、日本が対抗することを期待した教皇庁も、1936年(昭和11年)には、国家神道の儀礼であっても、愛国心を表すために信者が参加することを認める指針を發しました。カトリック学校でも、教育勅語の奉読や御真影の拝礼、宮城遥拝(皇居の方角に向かって拝礼すること)が広く行われるようになりました。さらに1939年(昭和14年)に宗教団体法が成立すると(施行は翌年)、カトリック教会も他の宗教も文部省の認可のもとで、その教えや活動について管理統制を受け、より積極的に国家体制と戦争への協力に加わっていったのです。

暁星中学校、上智大学卒業。1954年に司祭となり、1970年から東京大司教として以後30年間にわたって、教会の現代化を推進した第二バチカン公会議(1962-65年)への対応に揺れる日本のカトリック教会を指導した。1986年には、日本で開催されたアジア司教協議會連盟総會のミサ説教で、教会を代表する立場で初めて日本人の戦争責任を告白し、赦しを求めた。



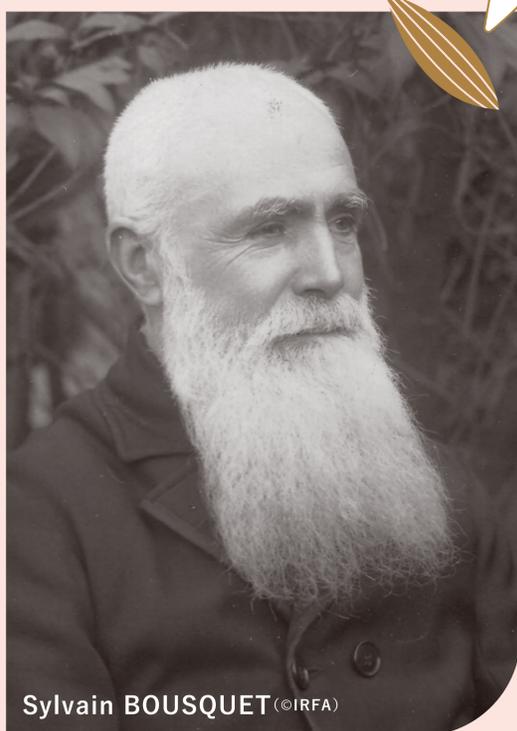
白柳誠一

1928 - 2009



カトリック教会が戦時体制への協力を表明しても、聖職者や信者に対して社会から厳しい目が向けられていたことには変わりはなく、過酷な弾圧が行われる場合もありました。

# 戦時下に弾圧を受けた カトリック司祭・修道者

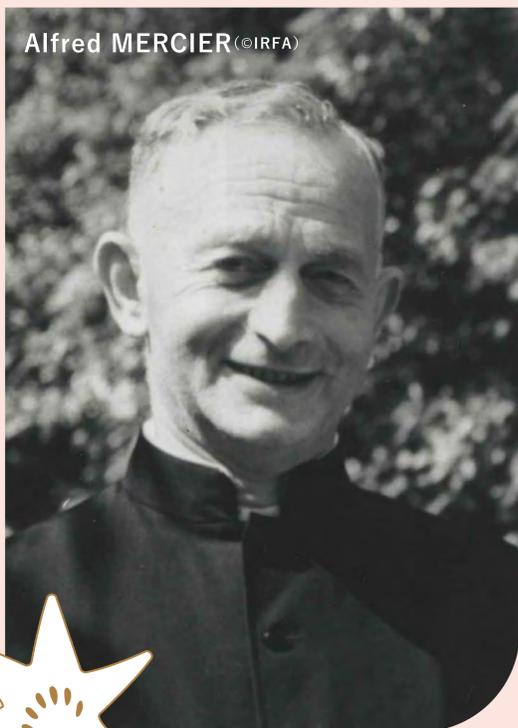


Sylvain BOUSQUET (©IRFA)

シルベン・ブスケ  
Sylvain Bousquet, MEP

1877 - 1943

フランス生まれのカトリック司祭。パリ外国宣教会に入会し、1901年に司祭に叙階され、来日した。第一次世界大戦中はフランスに戻り従軍する。戦後再来日し、1921年にカトリック夙川教会を創立。太平洋戦争中の1943年に憲兵隊に逮捕される。前年に憲兵が身分を偽って、神父のもとで教えを受け、反国家的な発言を誘導して記録していた。過酷な尋問と拷問によって精神を病み、精神病院で亡くなった。



Alfred MERCIER (©IRFA)

アルフレッド・メルシエ

Alfred Mercier, MEP

1905 - 1977

フランス生まれのカトリック司祭。パリ外国宣教会に入会し、1930年に叙階され、来日した。1945年5月に憲兵隊に連行され、終戦の翌日まで勾留された。過酷な取り調べと拷問を受けた。一方、憲兵の中にはカトリック信者もいて、その配慮で日本人神父と面会して聖体拝領を受けることもあった。戦後、獄中の経験を信者に語ることはなく、また元憲兵がアメリカ軍に告発しないように嘆願した際には、赦しを与えたという。

「憲兵たちは厚いブーツをはいたまま私の腰の上に乗れ、踊ったり、足踏みしたり、思いきり鞭で打ったりしました。ごく自然に私は死の準備をしました。死ぬことがきくと、最も確実にこの監獄から出る手段でした。ある日限界に達した私は『たとえ死刑であっても刑に処されるほうが、毎日理由もなく拷問されるよりましだ』と言いました。憲兵は皮肉な口調で答えました。『それではお前に優しくするだろう。俺の計画では、ここですます拷問を厳しくして、お前をじわりじわりと殺すつもりだ』と。」(パリ外国宣教会に提出された報告書より)

戸田帯刀

1898 - 1945

山梨県山梨郡西俣村に生まれ、開成中学校に進んだ。下宿先のいところがカトリックであった縁で、洗礼を受けたとされる。1923年11月ローマのウルバノ大学に留学し、1927年に司祭に叙階。帰国後東京都内の教会で務めた後、1940年に札幌使徒座代理に任命された。1942年に米英相手の戦争遂行に対する疑念を同僚に口にしたことで密告され、陸軍刑法違反容疑で逮捕されたが、公判では無罪とされた。1943年には横浜教区長となった。終戦の翌日、海軍に接收されていた山手教会を返還するよう要請した2日後の1945年8月18日に保土ヶ谷教会内で射殺体で発見された。敗戦後の混乱で犯人は不明のままとなっている。



戸田帯刀 (個人蔵)

# アルペ神父の逮捕



ペドロ・アルペ

Pedro Arrupe, SJ

1907 - 1991

ビルバオ(スペイン)生まれのカトリック司祭。イエズス会第28代総長(1965-1983)。マドリード大学で医学を学び、1927年にイエズス会に入会し、1936年に司祭に叙階。1938年に日本に派遣され、山口カトリック教会の主任司祭となった。1942年から広島のエズス会修練院の院長を務めた。広島原爆投下時には、被爆者の救護に当たり、修練院を病院として約200名の被爆者の治療に当たった。1958年-1965年イエズス会の日本管区長を務めた後に、イエズス会の総長に選ばれ、第二バチカン公会議を踏まえた教会と修道会の刷新を主導した。

## 「ペドロ・アルペと山口の信徒たち」

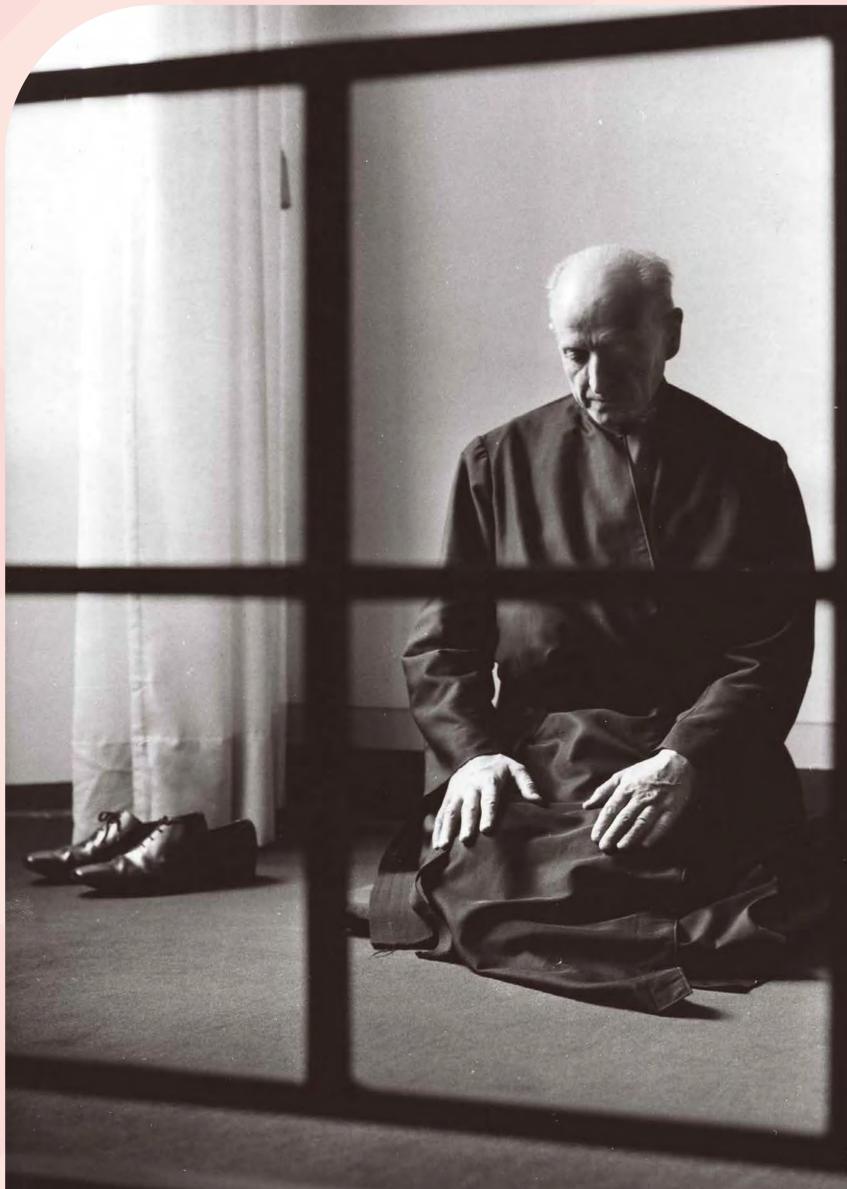
1941年12月8日、太平洋戦争が開戦したその日、ペドロ・アルペ神父はカトリック山口教会にて「無原罪の聖母の祝日」のミサを捧げていました。その最中、憲兵によって突然逮捕されます。容疑はスパイ行為でしたが、明確な説明もないまま教会から連行され、山口刑務所に拘留されました。多言語での書簡のやり取りや、欧米からの書籍の取り寄せなどが、スパイ行為とみなされたと考えられます。

拘留から半月が経過したクリスマス・イブの夜、アルペは独房の中で深い孤独と苦しみに沈んでいました。その中、窓の外からかすかにクリスマス・キャロルが聞こえてきたのです。それは、アルペが教会で信徒たちに教えていた歌であり、彼を慰めようと危険を顧みず集まった信徒たちが声を潜めて歌っていたものでした。この出来事を、アルペは後に「生涯で最も深い霊的聖体拝領であった」と振り返り、独房が「まるでベツレヘムの飼い葉桶のように輝いていた」と語っています。

逮捕直後のアルペは、「スペイン」と呼ばれ、食事を投げつけられるなど、屈辱的な扱いを受けていました。尋問は最大で37時間にも及んだとされます。しかし彼は、憲兵との会話を一般的な話題へと導き、そのやり取りを通じて、彼らを神へと導こうと努めたのです。その誠実で謙虚な姿勢に心を動かされた憲兵たちは、次第に敵意を解き、礼儀正しく敬意をもって接するようになっていきました。一ヶ月程度で、容疑は晴れ、アルペは釈放されます。釈放の際、彼の教えを聞いていた多くの憲兵たちが、感動を隠せない様子で見送ったとされます。釈放後、信徒たちは歓喜のうちにアルペを迎え入れ、彼はすぐに感謝のミサを捧げました。街では、獄中で親しくなった憲兵たちが「アルペさん」と親しげに声をかけるようになっていました。

「黙想部屋のアルペ神父」(©Jesuit.Media | General Curia Communications Office)

イエズス会の総長時代に総長室の隣に設けられていた個人用の黙想部屋で祈る姿。



# 日米開戦と外国人司祭・ 修道者の抑留

1941年（昭和16年）太平洋戦争の開戦時に、日本にとどまっていたカトリックの外国人聖職者（司祭、修道者）は約900人でした。このうち、日本が戦争状態に入ったアメリカ、イギリスと英連邦諸国（カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、アイルランド）などの国籍を有する司祭・修道者は、「敵国人」として警察によって抑留されたのです。これは、スパイ活動や破壊活動、また反戦を唱えるなどの「利敵行動」を防ぐと共に、日本人の敵意による危害から守るものとされました。開戦翌日にはまず男性（司祭・ブラザー）が抑留され、1942年7月には女性（シスター）も対象となり、学校や病院で働いていた多くのシスターが抑留されます。アメリカ人やイギリス人などに対してはそれぞれの国から事前に帰国勧告がなされていましたが、カトリックの聖職者は比較的多くがその使命のために残っていたのです。彼らに対しては、戦争捕虜の扱いに関するジュネーブ条約に準じて、通信の自由や生活物資の差し入れなどが認められていましたが、実際には、手紙が厳しい検閲を受けたり、物資が横領されたりすることもあり、収容施設によって扱いには差がありました。

戦後に聖心女子大学の初代学長になる聖心会のエリザベス・T・ブリットもアメリカ人だったために抑留され、その様子を手記に残しています（「聖心女子大学創立75周年記念常設展」を御覧ください）。

## 御真影と奉安殿

「教育勅語」の発布直後から全国の学校ではこれを朗読し、またこれに添えられた天皇の署名・捺印（御名御璽）に拝礼する「奉読式」が行われ、同時に天皇の肖像写真（御真影）が配布され、合わせて拝礼することが求められた。御真影は天皇自身と同じように大切にすることが求められ、火災や水害などの被害に遭わないように、御真影と教育勅語を納めるための頑丈な施設が全国の学校に作られた。これを「奉安殿」という。生徒は登下校の際など日々、これに向かって敬礼をすることが要求された。



小林聖心女子学院の奉安殿と学監（校長代理）の星野萬

（小林聖心女子学院アーカイブズ提供）

1935年（昭和10年）に「御真影」と「教育勅語」の下賜を受けることになり建設されたもの（下は2006年に解体される前の写真）。東京の聖心女子学院内でも講堂の隣に奉安殿が設置されていた。

